

『やっぱり気にしない』

著：坂井朱生

ill：冬乃郁也

その日、『アリス』は定休日だった。あの店へ行くこともなくて、灯は久しぶりに『さがしま』へと向かった。

遼の仕事にかかりきりになってから、店は閉めたままだ。そろそろ、また埃も溜まっているだろう。

「掃除したいし、たまには店も開けておきたいし」

いろいろと自分に言い訳を試みるものの、結局のところ、本心は修司の顔が見たいのだ。彼に会って、どうするか決めようと思った。

慣れた道を行き、『さがしま』に辿りつく。ふと見ると、一階から明かりが漏れていた。めずらしく、修司が一人で店にいるのだろうか。

「掃除してたりするのかな。……まさかね」

あの修司が、自発的に掃除などあり得ない。自分の考えを、すぐに自分で否定する。けれど、ふと修司の声が頭をよぎった。

「掃除したら、来てくれる？」

かのこと会った初日、修司の口からでた言葉だ。まさか、かのこを招くために、わざわざ掃除などしているのだろうか。

「って、違うってば。なに考えてんだ」

一人でいると、ろくなことを考えない。早く修司に会ってスッキリしよう。灯はドアに手をかけた。

建てつけの悪いドアが開き、中の様子が見える。奥で、人の気配がした。

「高津さん？」

いないの？ 灯が声をあげる。すると、なにかが動くような物音が聞こえた。灯はごちゃごちゃした店内の、さらに奥へ入った。

「あ……っ」

修司がいる。けれど、彼は一人ではなかった。

(なん、で？)

小さな声は、修司に聞こえたらしい。灯をちらりと見、追いはらうように手を振った。

かのこがいる。修司は、彼女とともにいた。かのこの両腕は修司の肩に絡みつき、修司の手はかのこの太腿を這う。

なんで、キス。しかも、熱烈な。

そんな光景を、どうして見なくてはならないんだろう。

嫌だ。

(嫌だ嫌だ嫌だ)

いくら仕事でも、こんなのは嫌だ。目のまえでも親しげに話されるのも、顔に触るのを許しているのも、——そこにいる灯を、まるでいないもののように扱うのも。

キス、しているのも。

(嫌だ……っ)

灯は店を飛びだした。ばたばたと走り、どことも知れない場所へ着く。ビルの壁に凭れ、ずるずるとしゃがみこんでいると、携帯電話が鳴った。

メールがとどいている。修司だ。

「今日は来るな、ってなんだよ」

まるで追いうちをかけるような、きつい一言だ。たぶん、なにか理由はあるのだろう。そう信じたいけれど、今はなにも考えられない。

「なんで……？ そんなことまで、しなきゃならないの？」

くすんと鼻を嚙りあげる。

(俺にしか、触らないって言ったのに)

だから逃げるなとまで言ったのに。約束を、破られてしまうのだろうか。

想像はしたけれど、そうかもしれないと思ったこともあるけれど、それを現実に見せつけられるなんてあんまりだ。

「……高津さんの、嘘つき」

湿った声で呟き、灯はよろよろと立ちあがった。

本文 p128～132 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>